

指定候補文化財について②

- 1 名称及び員数 木造大興禅師坐像（葦航道然像） 1 軀
- 2 文化財の種類 有形文化財（彫刻）
- 3 所在地 厚木市金田 262 番地 宗教法人建徳寺
- 4 所有者 厚木市金田 262 番地
宗教法人建徳寺 代表役員 吉田 正道
- 5 構造・法量 木造 古色塗り 玉眼 寄木造り
像高 51.0 センチメートル
頂一顎 17.1 センチメートル
面幅 11.4 センチメートル
耳張 15.2 センチメートル
面奥 17.6 センチメートル
胸奥 19.2 センチメートル
腹奥 20.7 センチメートル
肘張 37.5 センチメートル
袖裾張 54.0 センチメートル
膝張 48.4 センチメートル
膝高 （左） 9.8 センチメートル
（右） 10.1 センチメートル

6 所 見

本像は、臨済宗金田建徳寺の本堂内に安置される木造大興禅師坐像（葦航道然像）である。

建徳寺開山大興禅師の頂相（肖像）として伝わる。大興禅師（1219～1301）は葦航道然といい、信濃（現長野県）に生まれ、蘭溪道隆、無学祖元に従い、後に建長寺六世となった人物である。正安三年（1301）十月六日示寂。門下には実翁聡秀らがいる。

像は、膝上で払子を執って曲碌に坐す頂相によく見る姿に作られ、寄木造で、玉眼を嵌入している。その構造は、頭部を耳後で前後矧ぎとし、軀幹部前後二材、両側から軀側材を矧ぐ。脚部は横一材を寄せ、さらに法衣の垂下部横三材を矧ぐ。また、両袖口部、両手首先を別材で矧ぐ。像表面は下地に布貼りが施され、現状は古色を呈している。

全体形は頂相彫刻として、かなり形式の進んだ作例と思われるが彫技はなかなか洗練され鎌倉地方の像と同様によくまとまっている。その面部は、角ばった前頭部や目尻の下がった面、厚い耳朶などに像主の特徴をとらえ、やや誇張も感じられるものの、頂相らしい優れた写実表現を踏まえている。制作は、室町時代であろうと推察される。

また、本像の頭頂部には墨書銘が認められるが、大部分が上から墨で消されており、「像尊／安坐口殿」の文字がかろうじて読み取れるのみであり、文字は判読できない。

本像は、市内に残る本格的な頂相彫刻として重要な存在である。

以上、本像は厚木市にとって地域の歴史を考える上で重要な文化財であり、市指定文化財として誠に適切なものであると考えられる。

【参考文献】

『厚木市史 近世資料編 (1)社寺』昭和61年 厚木市

『厚木市史 中世資料編』平成元年 厚木市

『特別展図録 相模川流域のみほとけ』令和2年 神奈川県立歴史博物館

『相模川中流域の仏像彫刻に関する調査研究』令和4年 神野祐太